

Editorial

昨年、「世界に一つだけの花」という歌が若者の間で広く愛唱された。誰かに指示されてではない、自分が生きる意味や目標は自分で見つけ、他にかけがえない存在として在りたいという願いの現れであろう。若者たちがナンバーワンであるよりもオンリーワンであることを願う傾向は、最近、とみに強くなってきているようだが、研究者の世界ではいつの世にもオンリーワンであることが求められてきた。しかし、今までにない斬新な知見が発表されると、既存の研究者集団は驚愕し、疑い、無視するという反応を示すことも希ではなかったようだ。Jumping genesの発見で1983年にノーベル賞を受賞したバーバラ・マクリントック博士の伝記 (Keller, 1983) にそのような孤立と孤独の探求生活が語られている。研究者としてonly oneである生き方にはlonely oneであることを引き受ける辛い覚悟も要るようだ。

滋賀医科大学看護学ジャーナルもやっと第二巻の発行にこぎ着けたばかりで、はや、看護学の将来に対する貢献について語るのは早計で、いささか気もひけるが、人々の健康とそれに対する反応を探求対象として、新しい知見を重ねていく科学の一分野としての看護学と看護実践に貢献できるような研究成果を、ここから世界へ発信していきたいと願う気持ちから、本ジャーナルの編集委員会では、研究論文に研究の背景、ないし関連文献の検討を体系的に記述しようということを提案したい。

看護学では論文のなかで、「はじめに」に続いて「研究の背景」、ないし「関連文献」について記述する部分がくる。文字通りその研究の主題、方法、結果についてこれまでの研究成果を体系的に整理する。そういう作業を通して当面している課題や問題がどこまで解明されているか、導きだされた各々の結果や知識の間にどのような矛盾やギャップが存在しているか、その問題を解明するためにどのような方法

が考案されているかということが自ずとあぶり出されてくる。こうして、自分が行った研究、あるいはこれから行おうとしている研究の必要性が説得力をもってくる。物質を扱う領域の研究とは異なり、看護研究が対象とするのは、人間と健康に対する人間の反応、というきわめてファジーな現象なので、「この観点から観れば」という立場の宣言がいっそう必要になる。

関連文献を検討して研究の背景を論理的に記述するためには、文献検索が適切になさなければならない。それにはキーワードの置き方が文字通り鍵になる。本学の大学院生諸姉が演習で新鮮な驚きのもとに発見していかれるように、例えば「子ども」について検索しようとしても、キーワードをinfantとおくのと、childとおくのと、babyとおくのとでは検索されてくる関連論文はその数も内容も大いに異なっている。それぞれの概念はその内包が異なるわけだから、外延に相異が現れるのは当然のことと言えば当然だが、そうした当然のことを心の隅において「研究の背景」、ないし「関連文献」を記述してゆけば、自分の研究の独自性も読む人に柔らかくきっぱりと伝わり、only oneであることがlonely oneである必要もなくなるのではないだろうか。

本ジャーナルの編集委員会ではこのような思いをこめて、論文を書く際には「はじめに」に続いて「研究の背景」あるいは「関連文献」を加えていただくよう、投稿規定に小さな手直しを加えた。

Keller, EF. (1983). *A Feeling for The Organizm: The Life and Work of Barbara Mclintock*. New York: W.H. Freeman and Company.

滋賀医科大学看護学ジャーナル編集委員会

委員長 野島 良子